

児^こ
島^{じま}
一^{いっ}
平^{ぺい}

ひきこもりだった。
でも、だからこそ感じられたことやできたことがあった。



プロフィール

一九七一年生まれ。高校の時、不登校に。その後、紆余曲折を経て三四歳で起業。しかし、効率や経済ばかり追いかける毎日に嫌気がさし、耕作放棄地再生や農を通じて「人の再生」「地域の再生」を行うNPO法人みんなの未来かいたく団を設立。これをライフワークとして行っている。

○司会 皆様、こんにちは。ただいまより、二〇一八年度講座「生きること」の第二回目を開催いたします。

本日はお忙しい中、ご参加いただきまして、まことにありがとうございます。

それでは本日もお招きしました講師、児島一平さんのプロフィールをご紹介します。

児島一平さんは一九七一年二月にお生まれで、現在四七歳になられます。高校のとき、不登校でひきこもりとなり、その後、紆余曲折を経て普通の会社員とされましたが、三四歳のときに勤めていた会社が倒産となりました。それをきっかけにレンタルボックス事業を起業されました。

さらに四二歳でリサイクル品の買い取り、販売事業を行う株式会社一善堂を設立されましたが、効率や経済ばかりを追いかける毎日に疑問をもち、「耕作放棄地再生」や、「農」を通じて「人の再生」「地域の再生」を行う「NPO法人みんなの未来かいたく団」を設立されました。現在、門真市の市民公益活動支援センター指定管理事業なども行い、社会公益活動をライフワークとされています。

それでは、児島一平さんをお迎えしたいと思いますので、拍手でお願いいたします。

(拍手)

○児島一平 皆様、おはようございますじゃない、こんにちは。

初めましての方がほとんどだと思うんですが、この講座は今回で四一回目なんです。歴代を

見たらそうそうたるメンバーが登壇されているんですね。何で私が呼ばれたんだろうと、ちょっと疑問に思います。何の大した実績もないんですが、話してほしいということだったので、それではぜひということでお話させていただくことになりました。大した人生ではないのですが、四七年間生きてきた中でやってきたことや、どういう人生だったのかということ、今やっていること、この先のことなんかをちょっとお話させていただけたらいいのかなと考えております。今日は、ちょっと長丁場ですが、よろしくお願いいたします。

着席でいいですかね。じゃあ、すみません、座らせてもらいます。

「ひきこもりだった。でも、だからこそ感じられたことやできたことがあった」というタイトルでお話させていただきます。

まず、最初に紹介もあつたんですが、簡単なヒストリーを紹介させていただけたらと思います。

一六歳ごろ高校生活に嫌気がさしてひきこもりになってしまいました。一八歳のときに学校に行った記憶がほとんどないような気もするんですが、何とか卒業させてもらって就職しました。

しかし、その年の一二月にひきこもり復活で退職し、大学進学を目指すことになりました。これもいろいろいきさつがあるんですが、あとで詳しくお話させていただけたらと思います。

一九歳で奇跡的に大学に受かりましたが、二四歳で単位が足りずに留年して、五年で何とか卒業しました。その後、地元のスパーに就職しましたが、三三歳で会社が倒産して無職になりま

した。三四歳のときにレンタルボックス事業を天神橋筋商店街で起業しました。三七歳のとき、お店にてレンタル品の買い取り販売事業をはじめ、四二歳で利益とか効率だけを追い求める生活に何か疑問を感じる、閉塞感を感じるということで「みんなの未来かいたく団」を立ち上げました。「みんなの未来かいたく団」というのは、先ほどご紹介にあった耕作放棄地再生とか、農の再生というものを通じて人の再生、地域の再生を行うというNPOです。

それから、最近四五歳で門真市の指定管理事業をとったりもしています。いいことばかり書いてあるのですが、ざっと過ぎるので、もうちょっと細かく見ていきましょう、ということ、出ましたね、人生グラフ。ありがちなやつなんですけど、人生グラフでやるとちょっとわかりやすいんじゃないかなと思います。この辺は割とこう、変化があるのかな。この辺は割といい感じなんです。もうちょっとひきこもったあたりなんです。まあ、いい感じになったけれど、ちょっと四〇歳ぐらいでまた、底がきたという。細かく見ていきますと、まずゼロ歳、大手企業に勤めるサラリーマンの父と専業主婦の母の子として生まれました。いわゆる団塊ジュニアの世代ですね。高校なんかは一学年で五〇〇人のマンモス校だったんですね。ちょっと今じゃ考えられないと思うんですが、一学年五〇〇人とかいました。どちらかと言えば内向的なほうだったと思うんですが、必要に迫られれば、前に出ることもあるような、そんな感じのタイプでした。父がよく転勤になったので、二回転校しています。今、ちょうど河内長野のほうの地域で活動させていただいているんですが、やっぱり同じ地域でずっと生活していくということは、いいことな

かもしれないなど、感じますね。あまり転勤続きというのはどうなのかなと思います。これは単なる私の感覚なんです。幼なじみという言葉にすごくあこがれます。ないものねだりなのかもしれないですけどね。七歳頃、小学校の二年生の時ですかね、千葉から神戸に引っ越しています。神戸といっても、東灘区の海側で割と雑多な地域なんです。商売人の息子だとか、韓国人だとかも居て、韓国人街みたいなものもあってすごく楽しかったです。ところが小学校四年生のときに池田市の高台、ニュータウンに引っ越しになって、まわりは結構、大手企業に勤めるようなサラリーマン家庭ばかりで、何と言うんですかね、学校の成績というのがすごく重視されるような空気感でした。何かその一つの単位だけで比較されるような空気感がすごくあった土地でした。親心というのはそんなものなのかもしれませんが、いい大学に入って、いい会社という思いがありました。勉強というのは選択肢を広げることなので、大事なことであることはわかるんですけども、そのときは例えば歴史のおもしろさが全くわからなかった。もう単純に必死で記憶するだけでした。この年になったら歴史とかすごくおもしろいなと思うんですけど、学ぶ理由とか、何で勉強するんだろうとか、何か楽しみたいなのを教えてもらったらよかったですかなと思います。逆に、中学生のときは英語がすごく好きで、ビートルズの曲とかカーペンターズの曲なんかを流してくれたりする授業がすごく楽しかったです。だから今でも英語は片言なんですけど、しゃべれるんですよ。そういう学問のおもしろさというものをもうちょっと教えてもらえたほうがよかったのじゃないかなと思います。

それからやっぱり、いかに生きるかとか、幸せとは何なのかとか、そういうことって学校では教えてくれないですよ。そういうのって難しいのかもしれないですけど、もうちょっと教えてもらえたらよかったんじゃないかなと思います。中学校でそういう環境でしたので、がり勉になりました。もう本当に勉強ばかりしましたね。勉強しかしていないような勢いで勉強していました。その甲斐あって志望校、親の希望の進学校に通ったんですが、それが失敗の始まりだったのかなと思います。どのぐらいがり勉だったのかと言うとね、こんな感じですよ。どんな感じやねんという感じですけど、中学校のときはこんな感じでした。

次ですね。高校でいきなりこう、グラフが振り切れていますけれど、ひきこもりになってしまいました。学校に入ってみると、結構まわりは、いろいろ楽しみながら高校にきたような人ばかりで、僕はがり勉一筋で何とか受かったんですが、何かすごく強烈にコンプレックスを感じました。皆さん普通なんですよ。普通にファッションも楽しんで、女の子、異性との会話も楽しんでやってきたような人たちが普通に高校にきたみたいな感じですよ。ちょっと思い返してみたら、中学校のとき楽しく感じたのか、勉強をやってきたけれど、たまたま成績がよかったから、優越感みたいなのがやっぱりあったんだと思うんですよ。でも、みんなが同じような成績の高校に入ったときに勉強する理由がなくなっちゃったんですよ。成績がよかったから頑張ったけれど、別にその中に入ったら一凡人だったわけです。中学校で自分としては本当にがりがり勉強したつもりでしたし、これ以上まだ勉強しないといけないのかと思いました。それで、まわりの

人たちは楽々通ってきたように見えているんですね。そんな中で僕はもう勉強で勝てる気は全
くしませんでした。

あと中学校でサッカーが楽しかったのでサッカー部に入っていたんですね。遊びみたいな感
じで入っていたんですが、がりがり勉強していたんで筋力とか体力とかなくて、一人だけ練習に
ついていけなかったんですね。片足けんけんで、グラウンドを一周とかやるんですけど、全然
できないんですよ。ほかの皆は、ばあっと余裕で一周するんですよ。片足けんけんで一周とか全
然無理で、みんな終わっているのに、ずっと一人でやるんですね。何かすごく、恥ずかしかった
ですね。みんなは笑ってなかったのかもしれないですけど、自分としては笑われているように
感じました。一日で辞めました。勉強もだめやし、スポーツもだめ、コンプレックスをどんど
ん積み上げていくとですね、だんだん自分の殻に閉じこもるようになって、友達もほとんどで
きず、休み時間は一人で過ごす、そんな感じでした。もう辛くて辛くて次第に学校を休むようにな
って、授業にも全くついていけなくなりました。たまたま授業に出ても何かもうさっぱりわから
ん、数学なんか全くわからなかったですね。インテグラルとかシグマとか言われても全くわから
んみたいな感じでしたね。英語に力を入れた学校だったんですが、すごい量の英語をやっていた
んですね。文法の時間、リーディングの時間、英作文の時間とか、英語だけで三科目、四科目ぐ
らいましたね。リーディングの時間というのは、生徒が順番に訳していくんですね。先生に
当てられていくわけです。完璧に答えようと思ったらず習していくしかないんですけど、予習

なんかしたくないし、みんなどうせしてこないんだろうと思ったら、みんなスラスラ答えていくんですよ。すごいな、皆予習しているんだと思っていたんですけど、実は学校の近くの本屋さんに先輩方が訳を書いてつくっている虎の巻みたいなものが、こっそり売ってあるんですよ。僕はがり勉強して育ってきたので、そういうのとかって知らないわけです。要領というのがやっぱりあるんですね。そういうのが、生きていくためには必要なことなんですけれど、僕はできなかった、知らなかった。高校のことって、ほとんど記憶にないんですよ。学校の食堂で昼ごはんとか食べたはずなんですけれど、その風景すら思い出せません。どこに何があったかとか、全く思い出せません。通学路すら思い出せません。やっぱり辛過ぎると人間ってその間の記憶を消すんだらうなとそういうふうに思いました。

高校二年生になったらほとんど学校には行かなくなっていました。でも、友達もいないし、遊び方も知らないし、ニュータウンは住宅地で遊ぶ場所もないので、一日家でゲームとかパソコンで遊ぶしかないという状態でずっと過ごしました。もう親はたまらなそうですよね。そりゃ、たまに説教してきます。「学校行かないでどうするつもりなの」って。「いや、いや、いや、そんなのおれが聞きたいよ」という話ですよ。「どうするのって言われたって、おれだってわからないよ」みたいな感じですね。だんだん自分が価値のない存在に思えてくるわけですね。自己無価値感と言うんですかね。人間って不思議と、自分に価値がないと感じるようになるって無気力になってくるんですね。気力がなくなっていくんですよ。生きる気力がなくなっていく。三年生

になって、このままでは卒業できないよと言われました。先生とか親にも言われました。学校に行けない自分というのがすごく嫌で、何で行けないんだろう、自分は生きる価値がないんじゃないかと考えて、眠れない夜を過ごしましたね。どうしたらいいんだろう、どうしようもない、どうしようもできないんですよ。そんな風に暗い夜を過ごしてもね、朝になると、お腹が減るんですよ。不思議ですね、人間って。あれだけ悩んでいたのにお腹が減るんですよ。それでお腹が減って食べた御飯がおいしいんですよ。そりゃそうですよね、お腹が減っているから。もう死んだほうがええと思っていたのに、腹減るし、食った飯がうまいって「何やこれ」って思いましたよ。「自分って何やねん」とか思ったけど、でも多分命ってそんなもんなんかな、飯がうまかったら生きていけるんじゃないかなと、そんなことを感じたりしました。

一応テストだけは受けてくれと担任の先生に言われました。高校をこのまま中退しても、やっぱり就職とか不利な場合が多いということは、一応頭ではわかっているんですよ。そりゃそうだろうと。頑張って定期テストだけは受けに行きました。ほとんどゼロ点ですけれどね。とれて一桁みたいな感じでしたが、個別に追試とか補習とか受けたら、何とか単位をくれて卒業できました。ほとんどの先生ってやっぱり無事に卒業してほしいと思っっているんですよ。後から聞いた話では、職員会議で、あいつを卒業させてもいいのかと、ちょっと問題になっていたらしいですね。でも、何かその辺はすごく恵まれていて、卒業させていただきました。中学校のときは優越感を感じていたのに、高校でコンプレックスを感じてひきこもったという経験は、生きてい

く上でいろいろなことを示唆しているんじゃないかなと思いますね。

それから、やっぱり親やまわりの人は結構、支援をしようとしているんですけど、意外と支援する方法を知らないだけなんですよね。本当は支援をしようとしていて、それが「何で行かないの」という言葉になっていたと思うんですけど、それはあとから気づくことで、当時はそんなこととはわからなかった。

何とか卒業させてもらって、就職しました。ひきこもりのときにパソコンをつかってプログラミングなどを自分でやっていたので、当時はITとか言わなかったと思うんですが、今言うIT系の会社、プログラムのシステムをつくるような会社に就職しました。創業したての小さな会社で、社員が一〇人もいないような、こじんまりした会社でした。ちょうど時代はバブルの時代だったんじゃないかなと思います。景気がよかったですよね。ひきこもっている間ずっとやってきたわけですから、難しいプログラミングも結構できたんですよ。将来の期待も込めて、会社では高く評価してもらいました。その会社が一番核になる事業は大手の製造会社の根幹システムをつくることでした。この会社は小さい案件をたくさんとってきていたんですけれど、その核事業は相手の会社に行って、相手の会社の社員の人たちと一緒にシステムを組んでいくというものなんです。出向という形ですね。出向して、そこでシステムをつくっていくという仕事に配属されたんですね。僕に対する期待もあったんだと思います。勤務先は堺市だったので、ちょっと自宅がある池田市から通うのが遠く、会社側が借りてくれた堺のワンルームマンションに住み始め

ました。でも、IT系の仕事と言っても出向で、結局コミュニケーションなんですよね。どうしたいっていう、打ち合わせをずっと積み重ねてプログラミングしていくので、本当に仕事で大事なものは単なる技術であるプログラムより、コミュニケーションなんですよね。世間話もできない、気もきかない、出向先だから相手もそこまで面倒みてくれないわけですよね。そうして過ごしていたらだんだん会社に行くのが辛くなってきて、何もすることないから、ずっと一人で座っているときもあるわけです。でも、そういう時間帯に社員とコミュニケーションをとっていくということを知らないから、できなかったんですよね。それで辛くなって、またひきこもりになってしまいました。無断欠勤をしばらく続けて、会社が借りてくれているワンルームマンションにひきこもっていたんですね。昼間はまた無気力状態になって、ずっと寝ていました。そうしたら、さすがに社長が来ますよね。鍵がかかっているんですが、鍵をガチャンと開けられて、僕が寝ているときに、「どうした」といってバアッと入ってきたんですね。「わちゃ、来よった」と思って、怒られると思ったんですけど、最初の一言、「かわいそうに。辛い思いをさせてしまってますまなかった」と言ってくれたんですね。それから、「うちで働いてくれるんやったら部署を変えましょう。部署が多分向いていなかったんでしよう」と言ってくれたんですね。「ただ、君は大学に行ったほうがいいよ。君には余裕が感じられない」「余裕がないように思う」と言われました。一生懸命仕事をするのはいいけれども、余裕がないんですね。まさにその通りだと思えます。余裕がなかったんです。「大学へいってもっと見聞を広げたほうがいいよ」と

言ってくれました。私はそれを聞いて、「大学に遊びにいきなさい」と言っているように聞こえたんですよ。どちらかというところと厳しく育てられたので、大学って勉強しに行くところだというふうに思っていました。いや、それはそうなんですけれどね。大学は勉強しに行くところなんです。別に遊ぶために大学にいてもいいわけですよ。内心そう思っているでもいいわけですよ。そのときに初めて、「ああ、大学って遊びにいてもいいんだ」と知りました。泣きましたね。思いつく限りにならない自分、不甲斐なくてみっともない自分、社長の温かい言葉、それで自分は大学へいこうとそのとき決めたんですけど、すごく不安で不安でたまりませんでした。でも、何か希望が湧いてきて、気持ちがぐちゃぐちゃになって、ちょっと泣きましたね。会社を退職して、大学進学を目指すことにしました。

一二月に退職したんですけども、翌年の二月まで三か月しかなかったんですよ。一浪というか、就職しているの、その年落ちたら世間的には二浪になっちゃうんですよ。もう一年勉強して、世間的に二浪で大学へいくことも覚悟していたんですけど、嫌いな勉強をもう一年やる自信は、ちょっとなかったですね。通りそうな大学、学部だけをセレクトして、四つぐらい受けたんですけど、わからないから、本当に鉛筆を転がしていました。そうしたら、一つだけ受かっていましたよ。奇跡としか言いようがないんですが、よく受かったなと思いますね。大東市のとある大学に受かりました。大学が大東市にあり、池田市からちょっと通うのは遠かったので、またひとり暮らしを始めることになりました。ひとり暮らしと言っても、風呂なし、トイレは共同み

たいなボロアパートですね。家賃一五、〇〇〇円でした。一五、〇〇〇円と違ってちょっとありえないですよ。でも、何か人生がそこで一旦リセットがかかったような気持ちになりました。全く新しい生活、新しい出会いが待っていると、希望に満ち満ちて大学にいきました。すぐにマクドナルドでアルバイトも始めました。就職はしていたんですけれども、アルバイトというのは初めてでした。部活にも入って、新しい友達もできました。学生はお金ないんですが、時間はありませんね。大学をさぼって昼間っからプラプラ遊びに行くんですけれども、誰も何も言わないですよ。大学生ってすごい特権ですよ。自分は保障されているのにプラプラできる。この年でプラプラしていたらおかしいような目で見られますよね。でも、学生はいんですよ、許される。

あとバイト三昧してですね、貯めたお金でいろいろ遊びに行ったりしました。本当を言えば、彼女が欲しくてたまらなかったですね。年ごろなので一九歳、二〇歳前後の時は本当にもう異性のことがばかり考えていましたね。でも、アプローチの仕方とか知らないんですよ。デートの仕方もわからない。どうやってしゃべりかけたらいいかもわからない。そうになると、もうやるしかないですよ。当たって砕けろで、不器用にアプローチしては砕かれ、何とかデートの約束をとりつけてデートに行っても、何をしゃべったらいいかわからないから、会話が続かないんですよ。とにかくもう振られまくりました。それまでに五、六人は振られてますけれども、大学二回生のときに初めて彼女ができました。この人生のピークですね。あそこですね。でもやっぱり振ら

れるんですよね。三か月もちませんでした。速攻振られてですね、これまたこれはもうすごいダメージでしたね。しばらくひきこもりました。けどね、やっぱり同じなんです。高校のひきこもりと一緒にお腹が減るんですよ。お腹が減って、それで飯を食ったらうまいんですよ。立ち直れるんですね。全然立ち直れますね。もう、「きたきた！」って感じですね。飯食ったら治るということをもうわかってるわけですよ。

それと大学というのはいいところですよ。少々休んだぐらいでもゆったりとまた受け入れてくれるんですよ。高校の間はずっとほとんど誰ともしゃべってないわけですから、大学一、二年のときというのは、まだまだコミュニケーション能力というのは本当につたないもんです。ただ、バイト先だとか、大学の友達とか部活とかでいろいろな人と接しているうちに、だんだんとできるようになってくるんですね。会話ができるようになってくる。それで三回生、四回生のときには、社会人も入っているようなサークルにも入って、恋愛に遊びにバイトにと、青春を謳歌していました。これはあとの話なのですが、ちょっと青春を謳歌し過ぎて、大学に行かなくて四回生を二回やってしまったという、大失敗をやらかしてしまったりもしました。三回生のときには、バイト先とかでも適当にやるということを覚えるんですよ。バイト先で仕事中に「ちょっと出てくるわ」とか言って、外へ出て行くんですね。とにかく世間知らずで、やったらあかんこととは知らないもので、そういうことができちゃうんですよ。でも、別に許されるんですよ。今から考えると、社会って意外とファジーなんだなと思いますね。くそ真面目にやってい

たって、それを評価されるとは限らないですよ。いい加減にやっても評価されるときもある。こういった経験って、結構大事なのかもわからないですね。社会ってこういうもんだと感じながら、失敗を繰り返して、成長できるのが学生の特権なのかなと思います。

こうしてしゃべっていたら、本当に楽しい学生生活を送ったみたいですが、そういう面はもちろん多々ありましたけれども、やっぱり心の片隅には薄暗いものを抱えていました。大学でできた友達にも高校のときにひきこもっていたなんてことは一言も言いませんでした。絶対にしゃべりませんでした。一切、しゃべりませんでした。自分の弱い部分は絶対に隠していました。初めてデートに行ったくせに、「おれ何回か行っているし」「おれは知っているよ」みたいな雰囲気を出していました。初めてやったビリヤードも、「ああ、ビリヤードね、知ってる、知ってる」みたいな感じで、コンプレックスを感じることに対してすごく恐怖を感じていて、コンプレックスを感じていないように見せていましたね。三回生のとき、大学の中庭を歩いていたんですが、ふと見ると、見覚えのある人が歩いていってますよね。「あ、あいつや」と、すぐに誰だか思い出しました。中学校のときの同級生でした。中学生のとき、僕はわりとクラスでも勉強ができたので、その子に勉強を教えてあげていたんですよ。普通は同じ学年だったら講義とか大体かぶるんですけど、かぶらなかつたということ、三回生まで気づかなかつたということは、おそらくストレートでその大学に来ているということ、学年が一個上なんですよね。自分が勉強を教えていた人が、一個上の学年というのはすごく複雑な気持ちで、恥ずかしくてその場から逃げま

した。シュッと逃げました。逃げたんですよ。逃げるということは、やっぱり傷がまだ癒えてなかったんですね。まあ、そんな大学時代でした。

そんな感じで、全般的には楽しかったんですけど、就職することになって、モラトリアムな生活が終わるということ、すごく残念な気持ちになり、人生グラフィックにはちょっと若干下がっています。

お弁当屋さんで大学のときバイトをしていたので、食関係の仕事に就きたいなと思って、就職活動をしたんですが、いい加減なものです。三社ほどまわって、地元のローカルスーパーマーケットに内定をもらったので、もうそこに決めました。いい加減な感じで就職活動したもので、やる気も全然ないですし、適当に仕事していました。でも、アルバイトをしていた頃の、年齢が近い年上のオーナーさんにあこがれみたいなのがありましたね。バリバリ仕事をして、「オーナーって、かっこええな」みたいな、そういうあこがれがありました。それで成功したり、お金を稼いでセレブな生活したりとか、そういうことに対するあこがれというのはありました。それで、ネットワークビジネスにはまってしまっています。こういうあこがれもっている人は餌食ですよ。ネットワークビジネスの賛否は置いて、全く成果が生まれませんでした。そりゃそうですよね、ビジネスの「ビ」の字も知らない人間がうまくいくわけがない。当然、全く成果がなくて一年ともたず、すぐに挫折したんです。まわりの友達巻き込んで、速攻挫折するという、何ともひどいことをしたもんですが、この挫折が、ローカルスーパーマーケットの仕事をまず一生懸命

やってみよう、という気持ちにさせてくれました。そこからバリバリ仕事を始めました。たぶん、まわりもびっくりしたと思うんですが、今までやる気がなかった人間が急に仕事をしだした。人の三倍ぐらいはやったんじゃないかなと思います。ただ、人間不思議なもので自分が真面目にやり出すと不真面目にやっている人に対して無性に腹が立つんですよね。「おまえ仕事しろよ」みたいな雰囲気でもバリバリ仕事しているわけですよ。そうしたら、まわりの空気が悪くなるんですよね。それで店長から、「お前な、確かに仕事できるし、人一倍頑張っているのはわかるで。せやけどな、おまえ一人でやっているのと違うから、ギスギスした感じするのやめてくれるか。みんなで作ってんねんから」ということを言われました。でも、世間のことを知らないから生意気にも、「いやあ、店長、仕事せえへんやついらんでしょ。店長こそいいんですか、そんな仕事せんやつ放つといて」みたいな反発をよくしているんですね。そうしたら店長は言い返してきましたね。「おまえ何様のつもりや。おまえは完璧な人間なんか。偉そうに言うけれども、仕事完璧にできるんか。パーフェクトか。そんなんやつたら、おまえのほうがいいらん」と言われて、ハッと我にかえりましたね。そうです、よく考えたら自分は完璧とはほど遠いような人だった。他人のことをどうこう言うような人じゃなかった。人のできないところを見るんじゃないで、できるところを出しあって協力し合わなければ、ひとりでは大したことなんかできないんですよ。そうやって素直に謝ったら店長は「おお、よくわかってくれた」って言って、満面の笑顔で許してくれましたね。そんなこともあって、店長になりました。仕事もするし、チームワーク

もできるという店長になれたのかなと思います。なれたのか、ちょっとわからないですが、社長には気に入られて、次の異動で、新店の店長を任されることになりました。

人生グラフが若干上がってきているんですが、新店はたまたま大成しました。そしたら、社長にもっと気に入られて、ちょっと呼ばれて、「おまえ、次の新店も頼むわ。次の新店もおまえが行け」と言われました。二九歳でもう社内一のホープになりました。でも、人間というのは、そうやってうまくいきだすと調子に乗りだすんですよね。店長会議とかで、「そんなんやっているから売り上げあがらないんですよ」みたいな、生意気というか、ストレートな物言いをすれば皆から反発を食らうんですよ。上司あるいは同僚から反発を食らって、出世街道からちょっと外れてしまいました。そりゃそうですね。そういうこともうまいことやってこそ社会人ですよ。当時は、会社のために正論を言っていると思っていたんですけど、正論であればあるほど、慎重に発言しなければいけないということがわからなかったですね。こんな若僧にものを言われるほど会社の業績が落ち込んでいたので、会社にも当然、問題があったのでしょが、私のコミュニケーション能力にも相当な問題があったということですね。自分では大学でできるようなったつもりだったけど、全然だったということですよ。ひきこもり期間が三年間というのは、ひきこもりの中では多分少ないほうだと思うんですが、三年間のギャップを埋めるのに何年かかっているんだという話ですよ。それぐらいかかるんですよ。それは置いてですね、景気も少しずつバブルの残り火が消えていって、景気が後退していく中で、だんだん会社

の業績も下がっていった、ついに三二歳のときに倒産してしまいました。

ただ、ネットワークビジネスにはまったりもしましたが、アルバイトのときにかっこいいオーナーを見たりしたことから、夢を見ることを大事なことで感じ、いつか起業して自分で会社をやりたいなと思っていました。それに、新店もうまいこといったし、何かできるんじゃないかという、いい意味の勘違いをして、起業するために情報収集をしたり、いろいろと勉強はしていたので、倒産したときに僕一人だけ焦っていなかったというか、何かチャンスが来たように思いましたね。というのは、やっぱり会社って、楽というか、ぬるま湯なんですよ。出世コースからは外れていましたけれど、とりあえず行って適当に時間をつぶしてやったら給料入ってくるという、こんな楽なことはないので、倒産したからこそ踏ん切りがついたのであって、もし倒産していなかったらその会社に多分ずっといたと思いますね。起業して成功者になりたい、このチャンス逃したらもう二度とチャレンジする踏ん切りがつかないだろうということで、チャレンジすることにしました。

天神橋筋商店街にお店を出すことにしました。起業したビジネスというのは、レンタルボックスというお店で、当時ブームが起きかけていました。レンタルボックスというのは、ちょっと想像がつきにくいと思いますが、ちょっとビデオを。これは店が取材を受けて、フックンがきたんですよね。こういう箱を並べて、手づくり品だとかリサイクル品だとかをこの箱に出店してもらう感じですね。この箱の貸し場所代と販売手数料をもらうというビジネスです。これ若かりし

ときの私です。こんな感じのお店で、これがちょうどブームの初めだったので本當にうまくいったんです。でも、この店を出す前にトピックがありまして、そこからさかのぼること五年ぐらい前ですかね。自分がカッコいいと思っていた弁当屋さんのオーナーさんと就職をしたあとともよく連絡をとっていたのですが、新しいことをやり始めたんだという連絡があつて、「え、何ですか」と聞くと、レンタルボックスのお店だと言われました。見に行ったら、「このビジネスすげえな」と思いました。何がすごいかというと、専門知識がなくてもお店ができるんですよ。技術不要で、箱をつくったらいだけなので、元手もほとんどいらぬ。

それから、もう一つビジネス的なことを言うと、あの箱の場所を貸すだけで家賃の支払いができてしまうんですよ。固定収入で入ってくるので、それだけで家賃が払えてしまうというのはすぐリスクが少ない。これはすごい、このビジネスでおれはいつか起業するんだって、そのときに思いました。倒産して「やるぞ」となったときに、すぐにそのオーナーさんに連絡をとって、「起業することにしたんで、あのやり方を教えてほしい」と伝えました。オーナーは「ええよ」って快諾し、「おう、好きなだけ見ていけや。資料とかも全部見せたるし」と言ってくれました。すごいいい人ですね。でも、「ただな、おまえそれ何のためにするの」と、そのオーナーに聞かれました。びっくりしてきましたね。「何のためにするの」って聞かれたんです。「いや、何のためになって、いや、いや、えっと、だってリスク低いし、簡単にできるし、こんなええビジネスないやん」としか思わなかったですね。でも多分それ以上の答えを求めているんだろうな

と思つて、必死でこねくり出しました。「ボックス出店していたら、あそこに借りてくれている人いるでしょ。それで買物に来てくれる人いるでしょ。その人とのご縁をつないで…」とか、「ご縁をつないでいたらいい感じになるんと違いますの」みたいなことを無理やりこねくり出して、しどろもどろになりながら説明してひねり出したのが、「縁市場」という名前のお店でした。「縁市場」をちょっとかつこよく言つて、市場はフランス語でマルシェだから、「エンマルシェ」にしようかということ、 「エンマルシェ」という名前のお店を天神橋筋商店街に出しました。ただ、そのオーナーさんは、私が動揺して、しどろもどろで言っているのを見抜いてなのか、見抜いてないのかわからないんですが、あっさりとおお、それええやんけ。ええ名前やな。それはええな。何でも聞いてくれ。知っていることは全部教えたから」と言ってくれました。

でも、今になってわかるんですが、何のためにするのか、何がやりたいのかということがやっぱり本質なんですよね。

そうしてお店は大成功するんですが、三七歳のときにリーマンショックが起きて、ちょっとずつ売り上げは下がってきていたんですね。景気もだんだん悪くなってきていましたし、どんどん悪くなってきていた時代ですね。リーマンショックをきっかけに、急激に売り上げが下がりました、リサイクル品の買い取りを始めたり、インターネット販売を始めたりして、苦しみながらも何とか事業を立て直して、ちょっと回復しました。ところが、ようやく目途がついたかなと思っ

たら、東日本大震災です。これでまた一気に景気が悪くなって、とんでもない不景気が襲ってきました。中小企業にとってはとんでもない不景気だったと思いますね。皆さんもう御存じだとは思いますが、御存じのない人のためにどのぐらい不景気だったかというところ、こんぐらい不景気でした。もうこんな顔になりました。ちょっとよくわからないかもしれませんが、こんな感じのすごい不景気でした。

インターネット販売などを当時やり始めていたのですが、それにちょっと特化した会社をつくって、何とか事業を回転させていったんですが、さっき出てきましたように、だんだん何のためにやっているかわからなくなってきたんですよ。経済を追いかければ追いかけるほど、逆に経済に振り回される。リーマンショックなんか意味がわかりませんよ。東日本大震災も不幸な出来事でしたが、大阪に住んでいる僕からしたら遠い地での出来事が影響して、何かよくわからないけど経済が簡単に悪くなる。そういうことではなくて、何かもっと不変的なものを作りたい、ということを感じるようになりました。レンタルボックス事業のオーナーさんが、「何のためにやるのか」と言ったのをそのとき強烈に思い出しました。

「あれ、おれ何のためにやっていたんだっけ」そこから、自分の将来ビジョンというのを何のためにつくっていくのかということ、どういうビジョンをつくっていったらいいのだろうか、ということを通じて考えるようになりました。ちょうどそのとき、友達からビジョン構築セミナーがあるという話をもらって、そのセミナーを受けることにしました。そういう、自己啓発系セ

ナーって、僕はほとんど行ったことなかったの、初めて行ったようなものでした。なぜかそのときはセミナーを受けようと思って、受けました。セミナーでは、過去の自分とか、現在の自分とか、いちいち検証していくんですよね。そして最終的に自分のやりたいこと、ビジョンを見つけていくという仕組みなんです。思い返すと、小さいときは親父にしょっちゅう海に遊びに連れて行ってもらって、とっても楽しかった。それで、こんな魚釣ったりとかするんですね。小学校のときは、わりと山が近かったの、山に入って遊びに行くんですね。秘密基地って、誰しもやるかはわからないのですが、昭和生まれの男子はあるんじゃないかと思えます。「秘密基地つくるうぜ」とか言って遊ぶことがありました。すぐ近くの山でわらびが採れるんで、春にはわらび狩りに行きました。

それから高校のときにひきこもったのですが、このときに今まで以上にしっかりと向き合いました。原因は何だったんだろうかとか考えて、しっかりと向き合いました。

大学時代には、よく友達と野外に遊びに行ったり、キャンプしに行ったりとかしましたね。社会人になって、新店立ち上げで店のみんなで一丸となって本当に頑張ったんですね。それで成果が出たときは、すごく楽しかったですね。みんなでやって成功するってすごく楽しいですね。そして、起業して事業成功させたのは、何だったんだろうか、と思いだしたんですね。「お金が欲しかったからおれはやっていたのかな。そうだよ、お金が欲しかったからやったんだ。起業した」でも、実際やってみてみると、お金が欲しかったというよりはその先のが欲し

かったのかもわからないですね。お金でできることが欲しかったのかわからない。経営者というのとはすごく孤独で、一人で事業を立ち上げて、自分だけで頑張るんですよ。一応、従業員みたいなのはいるんですが、みんなで一丸となってやっているという雰囲気は余りなかったですね。「自分はそんな孤独なんかはしなかったのかな。ううん、違うよね」と思いました。みんなで何かに取り組んで、みんなで笑顔になりたかった、みんなでやりたかったんだと気づきました。ひきこもってから自分と向き合うということはそれなりにはやってきたんですが、そこからさらに深堀して、本当に自分はそう思っているのかと自問自答しました。禅問答みたいなものですね。「お金がほしい、それは本当か」「いや、違うのかもしれない」では、「こういうことをやりたい、それは本当か。お金がほしいだけなんと違うんか」自分にこう問いかけるんです。そこで、やっとビジョンができあがったんですが、それが今やっている「NPOみんなの未来かいたく団」の原型となりました。

そのみんなたく団のビジョンってどんなのというのをパッとやりたいと思います。社会問題になっている大阪近郊の耕作放棄地を開拓、開墾して、人と自然とをつなぐ「エコビレッジ」みたいなをつくっていきたくて考えています。そこでは「自然と人」をつないで農業体験したりするなど、いろいろな農的取り組みを行っていきます。

そういう「土地の再生」というのを通じた農的取り組みを「人の再生」「地域の再生」というものに絡めて推進していき、先ほど何か経済に振りまわされているのを感じたと言いましたが、

いき過ぎた経済主義に過度に振りまわされない持続可能なコミュニティをつくっていく。それで人が生きがいを感じることができる社会というのをつくっていききたいなと思っています。社会といたらちちょっと大げさですけど、コミュニティですね。コミュニティをつくっていききたいなと思っています。それが「みんなたく団」のビジョンです。ちょっと図にしてみました、こういう「土地の再生」をして、こういう感じで再生していきます。それで野菜を使ったイベントをやったりとかを通して、「地域の再生」もやっていきます。行政とか大学とかと一体になって、地域の人と協働していくということです。それと「人の再生」ということで、誰にでも居場所と出番があるようなコミュニティをつくっていく。これらの三つの要素が相互に絡み合うことで強力に推進していくというビジョンを立てました。

どういうことをやっているのか、チラチラッと具体的にご紹介していきたいと思います。「耕作放棄地再生」の取り組みということで、竹って強いので竹林の近くで耕作地を放棄すると、だんだん竹が押し寄せてくるんですよ。それで耕作地が竹林にこんなに覆われて、見えなくなりますが、切ったら柿畑があらわれてきたんですね。竹を切っても、刈り取っても、根っこが残っているとまたすぐに再生してくるので、その根っこを除去する作業をしないといけない。重機をいれて根っこを除去する。これをみんなで作っているんですね。楽しかった、楽しいですね。やっぱりみんなで作るのが楽しいです。こういう感じで、再生した土地に畝をつくって畑にしていく。難しいことを言いますと、現在社会問題の一つとして耕作放棄地というテーマ

があります。背景には農の担い手不足という問題があります。次の代が育たないので、耕作放棄してしまうんですね。それが荒れ地になっていくんです。農というのは人にとって大事な食を支えている、食は大事ですよ。飯がうまければ生きていけるんです。さらに耕作放棄地が広がることで、農地のもつ災害防止機能などが低下し、荒廃することによって周囲の農地へ悪影響が広がっていきます。耕作放棄が進むと最終的に竹林とかになっちゃうんですね。「もう手がつけられへん。戻すのにどんだけ大変やねん」みたいな感じですよ。これらを農地に再生するお手伝いをしている。「みんなの未来かいたく団」の略称で「みんなたく団」と言っているんですが、そういうことをやっています。こないちご狩りイベントをやったり、これは柿狩りイベント、これはジャガイモの収穫祭をしています。これは障害者キャンプ支援団体というのがありまして、そのワークショップを受け入れるということをやったんですね。再生した土地に障害者団体の受け入れを行って、苗をみんなで植えましょう、というワークをやっています。こんな感じでやっています。これにはどういう意味があるのかというと、大自然の中、太陽のもと、大地にしっかりと根をおろして、直に土にふれて、体を動かす、それがやっぱり人間のもつ生命エネルギーというのを取り戻すことになる。うちの団体に会社勤めの女の子がきていまして、ストレスで難聴になっていたんですね。ストレス性難聴になっていたので、ストレスで難聴になるんですよ。それだけ生命エネルギーというのを取り戻すというのは良いことがあるんだと思います。

作物の成長を助けて、それを見守る。生き物の成長を見守る。自分が食べるものを自分自身でつくる。食というのは生きていくことそのものですが、耕作放棄地を再生、活用することでこれらのことをわずかなお金で行うことができます。

また、NICE国際ワークキャンプの受け入れをやったりもします。オランダ人の高校生が来ました。これはビデオですね。こんな感じで。ちょっと音声は聞こえないかもわからないですが。こんな感じでやっています。これは小学校のこども会が来たときです。自然のままというやり方でやっています。肥料をあげない、もちろん農薬は撒かない。自然のままのこの環境の中で作物を育てるので、草がボウボウになってくるんですよ。これは、みんなで何をやっているかという大根を探しているんですよ。ちょっと笑えますよね。「大根どこや」みたいに探しているんですよ。

それから、ごろっと話は変わるんですが、門真市の委託事業をとりまして、門真市の市民公益活動支援センターでやっています。市民公益活動って何やねんという話ですが、市民の公益になるような活動、ボランティア活動のようなものです。そういう活動を支援する施設が、枚方市にもあるとは思いますが、門真市では、市が運営していたんです。その事業運営を業者さんやNPO団体に委託するんですよ。それをいただきまして、今やっております。

門真市なのですが、これは「みんなの未来こども農園 綿花栽培プロジェクト」って言いまして、うちの団体と認知症の支援団体と保育園児という三つのグループが一体となって綿花を栽培

しようというものです。何で綿花なのかというと、門真市では昔、紡績業の原料として綿花を栽培していたらしく、それを文化として残していきましよう、という取り組みを多世代でやっていると、いう意義あることをやっています。これはジェイコムでも流れたみたいですね。

私自身は豊中に住んでいたんですが、今年の春から河内長野市に転居しまして、これからさらにすてきなエコビレッジをつくっていききたいと考えています。「枚方じゃなくてすみません」なんです、河内長野でやっています。

ここでまとめをしたいなと思います。ひきこもりって、経緯とか環境は人それぞれです。正直言って僕のひきこもりっていうのは特殊だと思うし、いろいろ特殊な人がいると思います。私自身は、いろいろなひきこもり当事者の人の話を聞くところらかという軽度というか、三年とかって初級者レベルなんです。初級者ってなんやねんという感じですが、初級者レベルなんです。僕の場合は本当に運がよく、社長との出会い、IT系社長との出会いとかいろいろな出会いがあって、巡り合わせがよくて何か普通に今生活しています。でも、ひきこもりのときにパソコン触っていたのがのちのちとても役に立ったし、本をたくさん読んでいたので想像力を働かせるというのか、自分と対話するということに割と慣れていた。今経営者やっていますけれど、経営するというのは割と自分との対話なんです。自分はこういうふうにやっていますかとか、しょっちゅう自分と対話するんです。それと、店長代理になったときに店長に怒られたときの事件で、自分は完璧とはほど遠いという意識が生まれましたが、それはやっぱり「他人を

認める」とか、「共生していく」という意識につながっているんですよね。何も挫折することなく、シュッときていたら、完璧とはほど遠いとは思わないでしようから、やっぱりひきこもったらからこそ、生まれた意識だと思います。他人を認めて共生していくという意識は、社会活動を行っていく上ではすごく大事な意識だと思うんですね。何の引っかかりもなく大人になっていたら、僕は気づくことができなかつたかもしれない。

それから、「飯がうまければ生きていける」ということですね。大学時代に鬼のように振られても全然余裕みたいな、そういう強さって何だろうかと考えると、やっぱりひきこもりのときに培ったものなんじゃないかなと思います。全然生きていけるよ、ということをもとめとして書いてみました。

全員があてはまるわけじゃないし、単なる一人間の人生ですけれども、何か感じとれるものがあったらすごく嬉しいなと思います。

以上です。きょうはありがとうございました。

(拍手)

○司会 児島一平さん、ご講演ありがとうございました。

それでは、残りの時間で皆さんのご質問をお受けしたいと思います。質問のある方は、挙手をお願いいたします。どなたか質問のある方はございませんか。

○男性 四七年間の人生観、ありがとうございます。

○児島一平 すみません。若輩者ですが。

○男性 お話を聞きながら、なるほどと思う点もあるし、何でかなと思う点もある。ひきこもりには、おっしゃっているようにそれぞれ形はあると思うね。家庭環境であるとか、知人環境とか、学校環境とかね。今日聞いた話から、児島さんは確かにひきこもりの初級者かなと思うんです。それから、とにかく勉強が好きで、かなり頭のよい方だと感じました。ただ、小中学校はわからないですけども、ひきこもりになるときには、世間知らずでコミュニケーションが非常に苦手やったんかなと思います。その後高校、大学もやっぱり数回苦しまれましたが、そのときは非常に人間関係に恵まれて、意見を常に自分で受けとめられた。普通ならそんなこと聞けるか、とか思うんですけども、それも非常に素直に受けられたなと思います。一番感心したのは、他人を認める意識を持たれて、自分を素直に見つめられたということかなと思います。そういうコミュニケーションが苦手だった児島さんが企業を辞めて、NPO法人を立ち上げられたとき、土地をどうやって探したとか、法人をつくるときにどういうメンバーでされたのか。人間関係を築くことが苦手やと思っていましたので、それにしても時間的にも非常に早いですよね。どうやってそんなに人を集められて、そういう法人を立ち上げて、今報告があったようにあちこちで自然農業されているのかということに非常に感心をしていまして、その辺についてどういうように思っておられるのかということ聞かせていただけたらありがたいと思います。

○児島一平 はい、ありがとうございます。

まず、何ていうか、起業して自分がある程度できたという成功体験みたいなのがベースにあって、自分がこうしたいということ発信すれば、来てくれるという、根拠のない自信があったんですよね。結局そのとおりで、「みんなの未来かいたく団」のビジョンをつくって、こういうことをやっていきたいんだっていう理念をつくって、いろいろなところで発表させてもらいました。そうしたら勝手に「ああ、そんなんやったら俺もやりたい」「私もやりたい」といって、仲間が増えてくるんですよ。そうやって仲間集めができたとしか言いようがないというか、やっぱり理念とビジョンを掲げて発信することなんじゃないかなと、単純に思います。ほかの要素としては、コミュニティカフェをうまく使わせてもらったというか、そういう人が集まるようなスペースに結構出入りして、そこで常にコミュニケーションをとって行く。自分はこう思っているんだということ伝えていくことは一生懸命やりました。ありがとうございます。

○司会 ほかに質問はございませんか。

○男性 こんにちは。お話ありがとうございます。児島さん、お久しぶりです。てっきり河内長野にひきこもっていたんだと思っていました。お会いできて光栄です。質問なんですけれども、僕もひきこもりがちだったときがあって、そういう経験を活かしてひきこもりの子などを支援しているんですけども、今の時代のひきこもりの子らをどうやって社会との接点をつくってあげているのかというのは、児島さんの時代と少し違うと思います。どうしたらネット社会に縛られている子を出してあげられるのかというアドバイスをください。

○児島一平 なるほど。僕もひきこもりを何千人とかというレベルで見たわけじゃなくて、一生懸命数えても百人いかにくらのレベルだと思うので参考になるかどうか、よくわからないのですが、ひきこもりっていてもいろいろなステージがあると思うんですね。家において全く出ない、出れないというステージがまず一つのステージですね。居場所というか、いろいろな社会支援団体とかがあるので、そういうのを活用してちょっとでも家から出られて、人としゃべれるようなステージ。そこから本格的に社会復帰するには経済的にちょっと大変なので、じゃあ就業しようかということ、就業を目指すようなステージ。就業してからもコミュニケーション能力とかいろいろな部分で苦しむので、そこから本当に社会に馴染んでいくというようなステージと四つぐらいステージが多分あると思うんですね。私自身は時間的にも個人の能力的にも、ガッツリひきこもっている人の支援をすることは多分無理だろうなと感じています。そういう能力は余りないんじゃないかなと思います。ただ、就業に向かっていて、あるいは就業をもう既にしていてという人が、次のステージにいけるための場所を提供することはできるんじゃないかなと思います。特に就業している人ですね。就業しているけども、まだ全然社会に馴染めないぐらいの人たちに「みんなたく団」のこの場所に来てもらって、もっと社会と接続してもらおうと考えています。支援団体は就業を目指している人にすぐ就業してほしいからあおることもあるんですが、そうじゃなくて、「もっと緩やかにこうやっていこうよ。作物が採れるんだから、飯は食えるじゃん」みたいな感じで、緩やかな感じで接続していくと

いう意図もあります。こんな感じでいいですか。ちょっと違いますかね。

○男性 ありがとうございます。

○司会 ほかに質問ある方おられますか。

○男性 すみません。河内長野から来ました。児島さんとお会いしてからまだ二か月半ぐらいでしょうか、私は河内長野で生まれたんですけれど、児島さんよりも一年ほど前に河内長野に戻ってきました。その前の仕事は順調で、長い間、千葉の八千代市というところに住んでいました。帰ってきて何にもするつもりはなかったんですけれども、今はまちづくりのNPOを人に頼まれて手伝っています。今はまだ九月ですから、手伝い始めて八か月半ですね。実際には今年からという感じですね。九か月ぐらいです。それで、きょう児島さんのお話をお聞きして、自分が生まれてからのことを思い出しました。私も中学までは河内長野で、田舎の学校なのでそのときは勉強しなかったんですけれど、学校の成績はよくて、高校に行って不登校にはならなかったんですけれども、ほとんどひきこもり状態、同じような状態でしたね。何で生きているんだろうかというか、生きている意味がわからないとかですね。私は学校には行きましたけれども、授業の予習とかやったことなかったもので、何にもできなくなって、成績も落ちましたけれど、本気で思っていたわけではないにせよ、余りそのことについてはいいじゃないか、と思っていましたね。親からも先生からもいろいろ言われたんですけれども、変に強いところがあって、適当にやっていました。多分、児島さんのほうが真面目だと思うんです。私

のほうがいい加減だと思うんですね。今日の話を聞いて思ったのは、児島さん自身は克服されているんですけども、ひきこもりはよくないと、一般的には思われていますよね。ですけれど、今日のお話では、ひきこもりだったこともそれなりによかったですと、おしゃってましたね。パソコンの勉強をしたり、本を読んだりしてよかったですというふうに言われているわけで、その時点では、別にそれでもいいんじゃないかと思えます。問題なのは、社会との関係といえますか、外との関係が築けないことによって、経済活動もできないので、食べていけないというところだと思います。なので、食べていければ、別にいいんじゃないかと思えます。でも、自分として本当にそれでいいのかどうかというのは自分にはわからないので、そこで自分が生きるということは何か、信念をもってわかるといことが大切じゃないかと思うんですね。先ほどの質問も、ひきこもりの人を助けようというお話でしたし、いろいろ援助して、いかにしてひきこもりをなくすかというような風潮がありますが、私はひきこもりだったら、徹底的にひきこもればいいんじゃないかと思えます。その辺は、両方について児島さんならおわかりになると思うので、その辺の判断というのはどうでしょうか。

○児島一平　そうですね、私の個人的な意見なんですけど、おっしゃるとおり、別にひきこもってもいいんじゃないかなと思います。ただ、本人がどう感じるかだけですよね。本人がどういう人生にしたいかですよ。人間って割と社会的な生物なので、大部分の人は多分、社会とつながりたいって思っているんじゃないかなと思います。でも、それがなかなか上手にできな

い自分に対してほとんどの人はどこかでコンプレックスを感じているのではないかなと思います。感じていない人もいるだろうし、別にどうでもいいんだって思っている人は、別にひきこもってくれていたらいいと思うんですよ。でも、ひきこもりから脱したいと思っっているのに脱することができない人に対しては、やっぱり支援をしてあげたいなと思います。そのためにさっき言ったいろいろな団体が支援しているんですが、一般的な社会人に近いぐらいのステージの人しか、僕には支援するのが難しいなとは感じています。それでも結構大事なステージだと思っんですよ。このステージを支援しているところが逆にないんじゃないかなと僕は思っっていて、そこを支援したいなと思っっています。ちょっと違うかな。

○男性 いや、結構ですが、社会とつながりを持ちたいのに、できないからひきこもってしまったという感じですか。

○児島一平 そういうことだと思います。ほとんどの人は、つながりを持ちたいんだと思います。全員ではないと思いますが。ただ、どうやった方がいいのかわからない。自分にはなかなかできないという人が多いんじゃないかなというのが僕の印象です。あくまで僕の印象ですよ。本人にいちいち聞いてみないとわからないと思うので。はい。

○男性 すみません。今ご意見あったんですけどね。僕もいろいろな相談にのるんですけど、そういう自己選択できて、自分から社会につながりたいという気持ちのある人は前向きにできると思うんですね。ところが三〇、四〇歳になっても外に出たがらない。まず嫌がる。そ

れで親が年をとって行く。「私たちが年いったときに、この子どもないしたらええねん」という相談って、結構あるんですよ。そういう相談を受けても、今でているように解決策は、すぐないんですよ。児童相談所へ行ってもらうとか、ひきこもりの相談業務を専門にされているところには誘導するんです。そのときに本人もできたら一緒に行かれたらいいですよ、と言っても半分はやっぱり行かない。そういうひきこもりの方が非常に重症やと思うんです。障害児も同じなんですけれど、親が年をとってきた、そしてらもう面倒みれなくなる。経済的にお金は残したとしても、亡くなった後、この子をどうしてくれるのかという心配が非常にあります。そういう意味では、おっしゃっているようにひきこもりの子を社会に出してあげたいという気持ちはあっても、来てもらうまでにどれだけの時間がかかるのか、また、信頼関係をつくらなといけないという問題も実際にあると思います。

○**児島一平** そうですね、その部分は本当に人生をかけて支援していかないとなかなか支援できるようなものではないので、僕はなかなかそこまで立ち入れないんですが、そういう支援団体と組んでですね、ある程度出れるようになった人が、次のステージに進むためにうちの団体を活用してもらったらいかなという立ち位置で取り組んでいます。

○**司会** ほかに質問ある方はいらっしゃいますでしょうか。ないようでしたらこれで質問を終わらせていただきます。

今日は児島一平さんからお話をいただき、ひきこもりということに関しましていろいろ示

唆をいただきました。ひきこもりはだめなことだという風潮が、報道を聞いているとあるように感じますけれども、ひきこもりだからこそ気づけたことがあるということからも、その人の持っている特性をまず認めていくことが大切なのではないか、と今回の講座を拝聴して感じました。

それでは、皆さん大変お忙しい中、ご講演くださいました児島一平さんにもう一度大きな拍手をお願いいたします。本日はどうもありがとうございます。